

筑波 しらぎく

ポストコロナ時代に思う 解剖学教育の課題

筑波大学医学群長

田中 誠

三年前の春「コロナ禍に思う」と題し、新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的な大流行）を迎える中、日々の不安や葛藤、人々の生活様式の変化や制限下での医学教育の難しさ、学生たちの戸惑いなどを報告させていただきました。今、新型コロナウイルス感染症の出口がようやく見え始め、この拙文が世に出る頃には、感染症法上の分類が二類から五類へと変更されているかもしれません。社会生活上の規制も緩和され、巷ではマスクを外して過ごす人の割合も増えているでしょう。

この三年半の間、学生たちが本来は一堂に会して実施する実習・演習の類は、その教育効果を下げないよう私共は工夫を凝らし、時に複数教室を利用して、またある時は時差を設けて何とか実施してきました。最も困難と思われた病院実習も、分散登校やオンラインによる教育コンテンツを充実させるなど、各科で工夫して行ってきました。その中で、学生や教職員による厳密な健康管理と行動規制を行ったうえで、解剖学実習は一貫してコロナ禍以前と同様、十分な換気条件を確保した上で実施し、一人の感染者を出すことなく完遂できたことは大きな成果でありました。

では、コロナ禍が残した爪痕は負の遺産ばかりでしょうか？確かに、せっかく大学に入学したのにクラブ活動や友人たちとの直接の触れ合いは大幅に

発行 筑波大学
白菊会事務局
茨城県つくば市
天王台1-1-1
電話 029(853)3230
印刷 前田印刷株式会社
電話 029(875)6696



令和四年度慰霊式（祭壇）

字歴 題略 紙者 表筆

今井 凌雪（いまいりようせつ）
本名…今井 潤一（いまいじゅんいち）
大正十一年十二月十九日平成十一年七月二十六日
立命館大学卒・筑波大学名誉教授
日展参事・書法研究雪心会会長・
社団法人「日本書芸院」名誉顧問
朝日新聞社主催「現代書道二十人展」メンバー
日展文部大臣賞、日本芸術院恩賜賞受賞、
勲三等瑞宝章受賞

令和四年度慰霊式(学長挨拶)



制限され、パソコンと向き合うばかりの授業を強いられた学生たちは本当に気の毒でした。一方、医学類ではハイフレックス型授業システムを構築することにより、学生が授業を受ける際の選択肢が増え、後からオンデマンドで復習することが日常となり、実際には多くの試験で成績が向上しました。我々教職員はオンライン会議やオンラ

イン学会に習熟したことで、必ずしも対面で行う必要がない多くのことにも気付かされました。出張経費は節約でき、移動に伴う労力や時間は大幅に減りました。会議時間も心持ち短くなつたと感じているのは私だけでしょうか？何より学んだことは、コロナ禍という逆境の中で、また立ち直る過程において、特に重要なのはレジリエンスという心の持ち方であるということです。

そんな中、昨年ある関西の大学から大変ショッキングなニュースが発出されました。包み隠さず報告させていただきますと、この大学では医学教育のために寄せられた献体約五十体が、適切に防腐処理されていなかったということです。献体を管理する技術職員が一名しかいなかったこと、その職員が体調不良になったことなどが主因と考えられています。コロナ禍により業務の増大に拍車がかかったことも否めません。こうした問題を受け、文部科学省は全国の医学部、歯学部には献体業務を適切に行うよう点検を求める通知を出し、また国立大学医学部長会議で

は、問題意識の共有と対策について話し合いました。本学では幸い、技術職員三名体制でご遺体の搬送や処置・保存、実習のサポート等を行っており、適切なご遺体の管理を行っていますが、技術職員の育成には特殊な技能の伝承が必要であり、その習得には時間がかかります。全国的に献体管理に携わる技術職員は不足の一途をたどっており、今後こうした職員の育成と確保が解剖学教育を維持するうえで大きな課題として認識されるようになりました。

解剖学実習は、人体を解剖してその精緻な構造と機能を学ぶ、最も重要な医学教育であることは言うまでもなく、献体していただいた方やご遺族の思いを真摯に受け止め、医療人として成長する貴重な機会でもあります。献体はそうした教育を支える大変尊い制度であることを我々教職員一同は心に刻み、今後も適切なご遺体の管理をここにお誓い申し上げます。筑波大学白菊会の皆様におかれましては、引き続き医学教育へのご理解とご支援を賜りたく、ご協力をお願い申し上げます。

追慕の辞

本日、ここに筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、筑波大学白菊会会員を代表いたしまして、謹んで「追慕の辞」を捧げます。

今日、我が国の医学と医療は長足の進歩を遂げ、世界屈指の長寿国となりました。

これは、今迄多くの方々のご献体を賜り、その高い信念に基づく行為と、ご献体に対して何よりご理解とご協力をおしななかつたご遺族皆様方のお力により支えられた結果と思います。それにより立派な医師を社会へ送りだすことができたことで、医学的知識や医療技術が飛躍的進歩を遂げて参りました。その一方で、私共の周囲には全世界に拡散した新型コロナウイルス感染症をはじめとして薬害、脳死と臓器移植、超高齢化社会における終末医療のあり方、尊厳死および安楽死といった、生と死に関して、また「人間としての尊厳のあり方」におきまして、医学界・医療界にはまだまだ解決しなければ

ならない問題が山積しております。それでも多くの人々の努力の積み重ねと忍耐・限らない情熱によって、医学と医療はこれからも確実に前進し、充実した医療がますます広がって行くことでしょう。そのために私達筑波大学白菊会会員は、知識・技術だけではなく、豊かな人間性に優れた、患者さんの気持ちに寄り添う医師や医療従事者の養成をしていただきますよう日頃より強く願っております。

私達白菊会会員は、日頃受けている医療の恩恵に報い、また未来社会への大きな医学と医療の発展を願い、医学の基礎教育および研究の基本領域として重要である解剖実習、すなわち献体による「正常解剖」と呼ばれる解剖を行っていたため、信念と覚悟をもって献体登録を致しました。本日はご慰霊申し上げる方々とそのご遺族、ご親族の方々と一緒に、私達白菊会会員は献体登録者として、人生最後に「献体」を実行することで、すべての人々の健康と福祉、世界の平和、医学と医療の発展に貢献することができまますよう祈りたいと思います。また「病理解剖」

は病気の経過と原因の究明・難病の研究や治療法開発に役立ち、事件・事故で死因が不明な場合は「法医解剖」を行うことで、その死因を解明することができます。これらの解剖がより良い社会を築く上で、必要不可欠であることは皆様ご存知の通りであり、今後とも皆様のご協力をお願いするしだいです。

最後に、ご遺族の皆様、関係者の方々



が正常解剖、病理解剖、法医解剖に深くご理解を示されたことに改めて敬意を表します。と共に、ご献体いただき御遺志を全うなされた方々、および医学のために貢献された故人に感謝を捧げ、御冥福を心よりお祈り申し上げ「追慕の辞」とさせていただきます。

令和四年十月五日

筑波大学白菊会会員代表

高原 千賀

追慕の辞

本日、筑波大学篤志解剖体慰霊式が举行されるにあたり、解剖実習のためにご献体くださいました方々に、医学群学生を代表して謹んで追悼の言葉を捧げます。

私たちは、ご献体くださいました白菊会会員の皆様、並びにご遺族の方々のご厚意により、今年の五月中頃から六週間の解剖実習を行うことができました。

六週間にわたる解剖実習が終わり、およそ三カ月が経ちました。実習期間

中は学ぶことに必死でしたが、少し時間が経ち落ち着いて振り返った際に感じたことを述べさせていただきます。

初日、実習室へ足を踏み入れた瞬間に感じた、言い知れぬ緊張感は忘れることができません。ご献体くださった方を前にして初めて、これから私が解剖させていただくのだという実感を覚え、責任感を抱きました。またおがましくもその方の人生に、思いをせずにはいられませんでした。

実際に実習が始まると、想像していた以上に容易なものではありませんでした。ご献体いただいたご遺体、ひとりひとりに個性があり、机上で学んだこと通りにはいかず、「この方の場合はこちらなのだ」と理解することが必要でした。これは、今後医療に携わる上でも必要なことであり、早いうちから知ることができて幸せだと感じました。また一方で、慣れない動作に不甲斐ない思いをし、「ご献体くださった方を絶対に無下にしたくない。全てを吸収して自分の糧にできるよう全力を尽くしたい」という根底にあった理想と相対して悩むこともありました。



解剖実習がこれまでの学問と決定的に異なることは、感謝と責任感が常にあったことではないかと私は考えています。たとえ思うようにできなくても、ご献体くださった方への感謝の気持ちだけは忘れないようにしようと、黙祷を行うたび強く心に誓ったのを覚えています。そして最終日、納棺をさせていただいた際に、いかに自分が何物に

も代えがたい貴重な体験をさせていただいたのかを痛感し、改めて深い感謝の念を抱きました。

この実習を経てようやく医師への入り口に立つことができたように感じています。恐らくこの先、医師になるにあたってこういった機会は何度もあると思います。そして医師になつてからはそういった毎日が続くでしょう。だからこそ、この六週間で得たことや初心を忘れずに、「患者さんひとりひとりに寄り添える医師になる」という目標に向かって、白菊会の皆様のご期待に沿えるよう精進して参ります。

最後に、ご献体くださいました方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、肉親の死に際し、悲しみや苦しみの中、ご献体にご理解とご協力いただきましたご遺族の皆様の計り知れないご厚意に改めて感謝申し上げます。追慕の辞とさせていただきます。

令和四年十月五日

筑波大学医学群 医学類二年

石橋歩純

会員のみなさまからの便り

父の無念さを慮る

有賀文貴

十八年前父を献体にお預けしたが、最近父の事で時々気の滅入る状態になる。それは私が故郷N県の実家を飛び出し、上京してサラリーマン人生を歩んだ事に起因する。

父は農家の長男として出生、当り前のように先祖代々の家と土地を懸命に働き守ってきた。当時周辺の農家はほぼ長男が跡継ぎとして家に残り世襲してきた。息子が長男として生れた時「シメタ、これで俺の後は心配無い」と父は思ったであろう。弟妹も出来たが長じて家を離れている。私は成長するにつれ家中の雰囲気から、期待されている事を感じながら農作業を手伝っていたが、一向に身が入らなかった。通学している間、新聞・テレビで世の中に農業以外の職業が多くある事を知り、特に会社員に憧れを持つようになった。

学校を終える頃、父にその旨相談すると意外にあっさり承諾してくれた。今思うとその時は父母も若かったし、農作業は自分達で出来るから本人の希望を入れて外で働かせ、いづれ実家に戻せば位に考えたのだろう。お陰で私は希望通り上京し、大企業に勤めた。この間盆正月は必ず帰省し、小遣いも上げ、旅行等も連れ出し、人並みの親孝行はしてきた。又職場近くに家も建ててしまった。定年後も故郷に戻る気がせず現在に至っている。後年父母も、加齢と病気等で田舎での農作業が厳しくなり私の所へ同居した為、実家は空家となってしまった。父は私の所へ来てからも故郷恋しさか、年に数回日帰りで様子を見に帰っていた。私は父の最晩年に了解を得て、故郷の家、土地を処分した。父の期待を葬り先祖代々も私が途絶えさせた。ゴメンなさいお父さん。



人生の愛し方

大森 重 則

強い台風が去りまして、手紙を書き始めました。コロナのワクチン接種も六月三日に済ませました。

今年の一月に、三十年付き合ったカメラ仲間が亡くなりショックです。七年前に前立腺癌が見つかり治療を続けていましたが、骨盤に転移し切除手術の甲斐無くとも残念です。モノクロの現像やスナップ写真の撮り方を指導していただきました。お店に来てくれた時に、プリントを批評してもらうのが楽しかったです。貴重な友人を失いました。

私は口内炎ができ、食べ物がしみて困っています。歯医者さんに相談したら、ビタミンBとビタミンCを摂るように言われました。季節の変わり目が多いそうです。免疫が弱っているのかも知れません。食べる投資「ハーバー」が教える世界最強の食事術」を読んできました。ニンニクやブロッコリーが良いそうです。

美術の方では、画廊や近代美術館は、ほとんど見ています。近代美術館で見た戦後日本版画の展開、昭沼コレクションは東京で見ました。清宮質文、浜口陽三、斎藤清が良かった。常陽史料館の「笠原鉄明彫刻展 ―時の狭間に―」は驚いた。言葉では表現できないほどすごい作家だ。学芸員が、とにかくぶっ飛んでいると評価していました。頭の中がどうなっているのだろうと思いました。私は、岡本太郎やルネ・マグリット、ポール・デルヴォー、サルバドール・ダリ、メキシコの女流画家レメディオス・バロなどが好きです。メキシコには前衛画家がたくさんいます。龍ヶ崎の前衛画家加藤修さんに、大森さんは美術にむちゃくちゃ詳しいですねと褒められました。私は凡人だと思っていたので、ちよつと自信ができました。もう東京へは行かないので、画廊の地図が載った本をあげました。とても幸せな日々を楽しんでいます。先日、深夜ラジオの中で絵本作家の石津ちひろさんが、「ことを大切にすると人は、人生も大切にするものだ」と言っていました。名言ですね。その通りだと私も思います。

無 題

河 野 トシ子

私は九十五歳になった今、最高の幸せを戴いてありがたい毎日です。主人亡き後、娘婿にまかせた縫製工場は娘が五十三歳で倒れてからだんだん立ち行かず倒産。娘婿は糖尿悪化で亡くなり、車椅子の娘と十数年暮らしましたが令和元年に娘六十九歳で逝き、ひとりになり残された時間を悔いなく生きるにはと考えていたら、千葉に住む息子より事務所として借りてる所が切替なので、田舎で仕事するからとアメリカから帰省中の娘に手伝わせ、大きなトラックに荷物機材を積み自分の運転で親娘と来たのにびっくり！こちらも片づけをし、その後、孫はアメリカに帰りました。

息子の家族は奥さんとその母親、娘は二人おり、下はアメリカの大学に行つたまま帰らず、上は英語が得意で外資系の会社に就職して綾瀬のマンションに彼と住み丸の内に勤めています。

彼は香港生まれで五カ国語も話せる秀才だがおっとりしていて、ブルーさんブルーさんとみんなに好かれている青年です。この家族、毎月お母さんをお兄さんに頼んで三人でわが家に来ては、近くの温泉にみんなで行ったり、ごちそうを作って飲んだり食べたり、夜おそくまでにぎやかに楽しんで二泊三日で帰ります。

みんな旅が好きでアメリカの娘が来ると、あちらのお母さんと私と七人で息子の車で出かけます。令和二年は草津温泉で二泊して軽井沢方面をめぐり楽しんで、令和三年にはアメリカの娘の計画で下呂温泉から白川郷などをめぐり、金沢のホテルでは恐竜のお出迎えでびっくり！一泊して金沢市内と能登をめぐり、宇奈月温泉でトロッコ電車に乗ったり、孫娘に支えられ乍らあちこちと楽しい思いをさせてもらいました。

こんな日があるなんて夢のようで、其の昔成ってくる事、現われてくる事、すべて喜びに替えて生きるようにと聞かされ乍ら、なかなか喜べずに我慢ばかりの過去を思い返して、こんなけっ

こうなめぐり合わせを戴いてありがたいのと申し訳ない思いで、神様仏様にお礼を申し上げている毎日です。足腰痛くてもこの位でありがたいと喜びに替えて、お役に立たせて戴ける日まで、お与え戴いている命に感謝しつつ悔いなく生きています。

無題

小林久江

献体することは、より良い医者さまになっていただく為の私の願いであり、手助けです。

私の主人も医者になろうと北海道大学、東北大学と勉強したのですが、何十年も前は献体などなく、路上に倒れていた「こじき」さんを解剖したとのことでした。

海辺に生まれながら不思議な位、魚を食べない人でした。よく煮た肉は食べていました。

戦争（日米）も激しくなり、我が家の兄も早稲田大学の学徒動員で繰り上

げ卒業し、水戸歩兵第一〇二連隊に入隊。昭和十八年に「ニューギニア、ハンサ」にて戦死してしまいました。主人は戦後、店をつぐため帰らざるを得なくなり帰ってきました。

私は勝田市生まれで女学校二年の時に、水戸市県立高等女学校が空襲で全焼してしまいました。分散授業などであまり落ちついて勉強出来なかった時代です。戦争が終わり落ちついて、和裁・洋裁・生花など習い、縁があつて小林家に嫁いできました。何年か過ぎ、主人の希望で呉服屋を止め、本屋を始めました。

皆さんの薦めで市議会議員などもやり、老いた父、母の面倒も大変でした。議会では議長もし、人前で話すことは苦手でお酒も飲めず、大変だった様です。委員長になると県大会、国の大会にも茨城県代表で出ました。県、全国大会の時はお付きの人も行く訳ですが、絶対おことわりして一人で行き、夜中に帰ってきました。とにかくお酒が体に合わなかった様です。

人それぞれ、十人十色です。その知らない未来を勉強している皆さまのお

役に立てたらうれしく思います。人それぞれですから勉強も大変かと思いますが、頑張ってください。

年寄りの体ですが、一寸でもお役に立てたらうれしいです。どんなに細かく切りとつてもかまいません。主人も献体しましたから少しはお役に立てたと思います。

お墓の石には

「おかげさま

生かしてもらいありがとうございます

天国は 地ごくはどこに 我が心」

ときざまれております。

どうぞ頑張ってください。

今世紀最大の不幸に遭遇する

佐々木 利 男

もう私たちの時代には、戦争は起こらないだろうと思っていました。しかしロシアによるウクライナ侵攻によって打ち碎かれました。あつてはならないことが、まかり通っています。ロシアという大国の横暴によって、何万人

もの無事の人達が無惨な死に追いやられています。私たちひとり一人は、無力であってもこのロシアによるウクライナ戦争を絶対に許さず認めない。ロシアの戦争犯罪を生きている限り、糾弾したいと思います。

ウクライナ国民の皆様方に、一日も早く平穏無事な生活を送ることが出来ますように願ってやみません。

何故、此处に

佐藤 怜 子

夏が名残惜しそうに去りゆき次の季節がやってくる。私たちは年月を重ねるごとに多くの過去形を生産し続け、縷々とした膨大な量の想い出を心の底の襞に押し込めたまま、日常、気に掛けることもない。人生の黄昏時に向かい始めた今、その折々のたまさかな出来事、かけがえのない偶然の連なり、まるで、知らない街角にでも迷い込んでしまったようなあの時この時が幻のように浮かんでは消えていく。不思議



令和四年度慰霊式（会場風景）

な糸で紡がれた邂逅や忘れがたい人との再会と別離、そして、歓喜や悲嘆、幾つものパーツが合わさり放れ、何時しか生まれた筋書きと折々の物語、それらの何層もの道案内に導かれ今日の私という原型が造られたに相違ない。もし、そうであるのなら、私は生かされていることへの恩寵を理解していたのだろうか。手探りで歩んできた凸凹

だらけの道、長い年月をかけて辿り着いた晩年と表す今、私は木霊になり、心地良い溜息と共に何度も問いかけているひとつの言葉に束ねられていく。

限られた命の持ち時間は定かではないけれど何時の日にか完結の日を迎える。存在しなくなる我が身を受容することは人間への探究と普遍性でも表現するのだろうか。身体機能の秩序立てた低下から思いついた「死にゆく準備教育」と適宜な距離を置きながらも親交を温めていく。所謂、生の謎は人が名付けた神という存在の確証を不問のままに「何かが起こり通り過ぎていった」と形容するような感覚的なものと捉えてみる。私を育んだ栄養素の主は、走る時間にマティスのような絵具を注ぎ、惜しみなく生かされてきた恩恵と無数の謎とが手を繋ぎ、希求・挑戦・透明さに幼さと大胆の塊が沈殿している。格段に難解でもなく極めてシンプルなことなのに遠回りしていただけないかもしれない。そして、何時ものことながら無言の言葉がコトコトと胸を叩いている。

「私は何故、いま此処にいるのか」

学ぶ楽しさを満喫しています

高橋 睦子

私達が大学受験の頃は、四当五落という言葉が流行しておりました。一日四時間の睡眠なら合格、五時間寝ると不合格という事でした。そのため、ただガムシヤラに机に向かう日々でした。勉強は楽しいものではなく、良い成績と大学合格だけのためだったのです。でもそれは、学生として当然の事で苦痛ではありませんでした。高校・大学・就職・結婚・子育てと月日が流れ気がつけば、子供達は自立し、夫は天国へと旅立ち一人になっていました。

私は、六十三歳で肺がんの手術をし、助けていただいた命を無駄にする事なく、大切に生きて行こうと「パソコン」を先ず始めました。メールの交換・写真・動画……と病気の事など忘れ夢中で楽しみました。

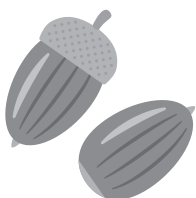
夫亡き後七十四歳の時、高齢者住宅に入居し自由気ままな生活を始めました。パソコンから、おり紙・漢字パズ

ル・数独と次々に楽しみを見つけました。おり紙で「傘」を作り、おり紙協会の雑誌に取り上げられた時は本当にうれしかったです。最近はダイヤモンドアートも始め、作品が完成した時の満足感は何ともいえません。

良い成績と大学合格のためにしていた勉強に比べ、今はボケ防止とはいえない自分自身のために毎日楽しみ乍らしている勉強と趣味、学ぶ事の楽しさを満喫し一日がとても短く感じられます。

献体出来るその日迄、楽しく学び充実した日々が送れる様、更に努力して行きたいと思っております。「学ぶ」という事がこんなにも楽しいとは、八十六歳にして改めて感じております。人生死ぬ迄勉強なのです。楽しく学べ楽しく生きて行きます。

勉強万歳です!!



献体できる悦びⅡ

田 中 秀 明

「献体できる喜び」を令和二年の「筑波しらぎく」に掲載していただいたから三年が経ちました。この三年間は、世の中がコロナとの闘いを続ける期間でした。コロナに感染すると献体できないと聞いていたので、人混みを避け、マスクをしていました。しかし、五回目のワクチン接種後、非常に軽い症状で済みましたが、検査キットで二本の赤線が出て感染していたことがわかりました。

私は今年で八十三歳になりますが、おかげさまで病気にかかることなく元気に暮らしています。毎週火曜日、木曜日、土曜日には、家のすぐ近くの公園で老人会（みどり会といいます）が主催するグランドゴルフに出かけます。十五～十六人の元気な高齢者が集まって、一時間半ほどプレーとおしゃべりを楽しんでいます。元気な高齢者と書きましたが、七十代は二人だけで、残

りは全員八十歳以上で、最高齢は九十歳の元気な男性です。人生の先輩であり、学ぶべきことも多くあります。私自身も、自分の両親の年齢を超えて生きながらえているので、「おまけの人生」と思っています。できるだけ自然な人間の姿のまま献体したいと願っています。

八十年の想い

中山 たか子

私の祖父は、八十年前胃癌で亡くなりました。当時陸の孤島と言われたこの地から、どんな方法で行ったのか、それまでは聞いていませんが東大病院で胃癌と言われ、当時でも手術をすれば、三年の延命ができたそうです。保険などない時代、小さい農家では、田畑を全部売らなくては手術ができないとのこと、一人娘（私の母）のため手術はあきらめたとのことでした。

それからの祖父は、痛みとのたたかいが壮絶だったそうで、祖父は献体な

んて言葉も知らなかったと思うけど、自分と同じ痛みをしないように、体を解剖してでも、今後の医療につかってもらいたいと、そう言っていたそうです。私は母からそういう話は聞いていたのですが、父や母とは、死とか死後の話しとかはしないうちに、二人とも心筋梗塞で一週間でこの世を去ってしまいました。

あれから二十年、やっと自分もそういう年に成り、今からでも会ったことのないおじいちゃんの八十年前の想いを私がしようと思い、献体することになりました。

写真でしか見たことのないおじいちゃん、おばあちゃん、仲よく手をつないであの世に行った父と母に、私献体することにしたよ、とお墓参りであいさつしてきました。



大腸ガンと言われて

野口昌俊

三年もコロナで世間が騒がれましたが、やっと落ち着いてきました。

私は昌俊の妻ですが、本人はペンを取ることができないので、初めて代理で書くことになりました。

主人は毎月、糖尿病で病院に行っています。そこでかかりつけの医者から、ちょっとおかしいからと言われ、家から近い病院へ紹介状を書いて頂きました。その病院で診察したところ、大腸ガンと言われました。すぐさま入院して検査が始まりました。いろいろと説明を聞き、悪い所を切除するという事でした。

手術の当日は、取った物を見せてもらいましたが、すぐくそれが大きかったので驚きました。しばらくしてから約一カ月で退院となり、元気になりました。この時は、ちょうどコロナの時期だったので、病院も患者でいっぱいでした。

無題

長谷川愛子

あやめ咲き心落ち着く候と成りました。先日は筑波しらぎく会報誌を戴き有難うございました。コロナ感染症の現況にもかかわらず会報誌を拝見し、安心して日々を送っています。私も八十九歳になり最終章をどう生きるか悩んでおりましたが、会報誌の中からみなさまの意見体験を知覚して、八十九年間生きたこの体が医学発展のために何らかのお役に立てるか考えると、生きる喜びに変わり躍動感が漲ってきました。人は生老病死と仏法に決まり変えることは出来ませんが、命ある限り何ものをも乗り越えて、献体の成就することが出来るまで願い通して、最後の一日まで健康で体を護って参ります。



解を見い出せない命題

早川幸雄

喜寿を迎える私は、父の転勤で昭和三十七年春に新潟県直江津市（現上越市）から福島県平市（現いわき市）へ引越し、市立中学校に入学しました。福島県浜通り南部の田舎町ながら異様に進学熱が高く、平一小↓平一中↓磐城高校↓東北大へと進む恰も番町小↓麹町中↓日比谷高校↓東大を模したコースが敷かれていました。同期五〇〇名の概ね一割は、市の学区外は素より周辺市町村のみならず遠くは北茨城地区からの越境入学で、学区内に下宿している級友もありました。教育熱心で経済的にも恵まれた家庭で育った越境入学生は優等生が多く、生徒会役員も殆どを彼等で占められていました。常磐地区は、平を中心に隣接する内郷、湯本、勿来及び小名浜の五市と町村で構成されましたが、後に合併しいわき市となりました。合併前の各市には県立高校が在ったものの、平市に在る磐城高校でな

ければ世間に認められないとの偏狭感が蔓延って、高校受験を目指す中学浪人が全国で一番多い異常な地区と芳しくない評判が流布されていました。田舎で進学塾は殆ど存在しなかったため、汚名返上の苦肉の策としてか平一中には進学が叶わなかった卒業生のための補習学級さえ在りました。入学した中学校では中間や学期末の考査に加え月例考査が行われ、学年毎に一番からビリ迄約一五〇〇名の順位と氏名は体育館内壁一杯に墨書の長い巻紙で張り出され全校生の目に晒されました。墨書の負担軽減か三年次から各教室内にガリ版刷り用紙の掲示と変わったものの、全順位と氏名の掲示と言う基本は変更されないままでした。人権尊重や個人情報保護が取り分け重要視される今日では、到底容認されない事に疑問を抱かれず教師や父兄は愚か世間さえ良かれと納得していたのでしょうか。厳しい競争社会に立ち向かうべく試練を強いられた団塊世代の過去の真相と難関校に入るべく学習塾通いを余儀なくされる生徒の昨今の実態とが重なるも良否の判断は未だに尽き兼ねています。

解剖実習を終えて

小林 桜子

医師になろうと決意し、総合学域群から医学類へと移行してから一カ月ほど経った頃、解剖実習は始まった。医師になる上で必ず通る道であるこの実習を、どこか他人事のように、実感なく構えていた私の怠慢な心持ちは、実習室に横たえられたご遺体を目にして緊張へと一変した。人の命に向き合う実習なのだと、ビニールと布で包まれたご遺体を前に理解した。他の学生たちも同じように感じていたのだろう、実習前の説明を受ける室内には張り詰めるような静寂があったことを覚えている。

実際の体の構造について解剖実習なしに理解しきることは不可能であると、実習を始めてよく分かった。次の日の予習をおさぎにはしたくなかったし、何しろ真摯に取り組むことは私たちの義務であるのだから、実習書やアトラスを参考に剖出の手順や様子をイメージしてから実習に臨んではいたのだが、

想像通りに剖出が進むことはほとんどなかった。剖出すること自体がそもそも難しく、見つけ出した組織が何であるのか同定するのにも時間がかかる。そして多くの組織や器官は、教科書に載っている通りの様子をしていなかった。筋肉の厚みや脂肪の量、血管の走行さえ異なることに驚き、また、私が担当させていただいたご遺体には何箇所かの出血や動脈瘤などがあった。腹臥位にしたとき、腰部に床ずれを見つけてはつとした。亡くなる前のご様子をつい思い浮かべた。寝たきりでいらしたのだろうか。お辛かっただろうか。そのようなことが頭をよぎった。そして、僥倖ながら、自分より遥かに長い年月を生きてこられたご生涯と、その最後を献体によって終わることを決断されたご遺志の尊さに思いを馳せた。

解剖実習において、実際に人の体に触れ、その姿を知るということには、生物学的・医学的な理解を深めるという意味はもちろんのこと、その人ひとりに真剣に向き合うことの重要性を知るという意味もあるように思われる。人それぞれに体の中がこんなにも違っ

ているのだから、治療の仕方も一意には定まらない。目の前の一人に対して最善を尽くすためには、医師はその人について心身ともによく理解し、本当に合った治療を模索しなければならぬのだと思った。

実習最後の日、納棺を終えた実習室は再びしんと静まっていたが、初日のような緊張感はなく、むしろ穏やかな達成感が満ちていた。私自身も、余裕とは言えない六週間であったのに名残惜しささえ感じるのが不思議だった。号令に合わせて、最後の黙祷をする。目を閉じれば、ご遺体の安らかな顔が思い浮かんだ。花束と小さなメッセージカードでは到底伝えきれないくらいの感謝が胸に溢れた。医師になるということ、自分ではない誰かの人生に対して責任を持つということの意味を、改めて深く考えさせられた実習だった。最後になります、このような本当に貴重な経験をさせてくださった故人とご遺族の方々、そして支えてくださった先生方に、心より感謝申し上げます。この経験を忘れず、これからも学んで参ります。

近藤 美保

実習初日、死装束に包まれ静かに眠る曾祖母を前にした、あのときのやるせなさが鮮明に甦った。安らかな顔をされた目の前のご遺体は、どのような人生を歩まれたのだろうかと思いを馳せていた。これから、人生を全うされるその死を悼まれたであろう、一人の人間と向き合い、身体の内부를拝見するという事実を強く意識した瞬間であった。それを意識すればするほど、身体を侵してしまっただけで申し訳ないと感じ、本当に良いのだろうかと自問自答した。メスを持つ手が竦んだあの緊張感と、共に感じた責任感はいつまでも忘れない。

思えば、これまでの人生で誰かのために勉強に励んだことがなかった。受験や医学基礎の勉強も、興味や目標が動機となり、自然にやりたいこととして自分の中に位置していた。以前から、ご献体いただいた方やご家族が、献体してよかった、解剖実習は有意義で不可欠なものであると心から思っていた。そのため、学ぶことに対して責任と義

務を強く感じていた。実習では、周りの音が聞こえない程集中し、休憩時間も惜しんで五時間以上に渡り、手と頭を動かし続けた。家に帰ると全身にどつと疲れを感じたが、その日のまとめと復習、予習が続いた。朝起きてから眠りにつくまで、いつときも解剖が頭から離れることがなく、常に責任感や義務感、使命感に駆られていた。初めて



令和四年度慰霊式（献花）

誰かのために勉強した経験であり、間違いない、人生で最も勉強した六週間であった。それでも、剖出することができなかった構造は残り、最終日にはもう少し時間が欲しい、学びきれず申し訳ないと悔しさや後悔を感じた。恐らく、医学という学問はどれだけ勉強しても、どれだけ研究が進んでも、その全てを知ることとは不可能なのだろう。だからこそ、こんなにも面白い学問は他にないように思う。多くの人の想いや願いを受け、患者のために学び続けることが、医学生、いずれは医師としての使命であると気づくことができた。

実習では、人体の精巧さだけでなく、教科書の説明と異なる構造に気づかされ、その個人差や変異に幾度も驚かされた。今まで薬や治療効果に個人差があることを知識としては知っていたが、実習を通してその意味を体感的に理解することができた。また、医師となつたときに、病気を見るのではなく、目の前の患者個人を診ることの大切さも学んだ。もちろん、教科書や論文で病気について深く知り、技術を得ることは大切であり、多大な努力と時間も要

するだろう。しかしどれだけ学んでも、患者個人を見つめないと病気の進行や治療効果はわからない。その患者が何に対して痛みや苦しみを感じているのかも、目の前の患者のみが教えてくれることである。実習では「目の前のご献体いただいた方が先生です」と言われたが、今後はときに教科書や治療法などをも疑いながら、目の前の患者から学ぶ姿勢を心に留め続けたい。そうして、患者の痛みや苦しみに寄り添える医師になりたいと願う。

実習を終えた今は、心からの感謝を感じている。ご献体いただいた方とご家族、先生方、班員、友人、先輩方、家族など多くの方々の支えのもと、このような濃密な日々から大きな学びと気づきを得ることができた。これから先、ご献体いただいた方とご家族の崇高な意志を自分の中で生かし続け、良き医師になるための行動に感謝を示し続けていくことをここに誓いたい。

最後になりましたが、このような貴重な経験をさせていただいたことに、心からの感謝を申し上げます。

齋藤 圭 祐

「怖い」最初に解剖実習室に入り、抱いた感想である。

胸元に白菊が置かれ、ビニールに包まれたご遺体が並んでいた。その光景に恐怖すると同時に、この実習が医師になる上でまたとない貴重な機会であることを実感させられた。ガイダンスで学類長のお話をお聞きして、入室と同時に崩れた覚悟が何とか形を取り戻してきた。元々医学や生物学への興味は強く、その忘れかけていた好奇心が蘇ってきた。

ご献体が無償で行われていることでこの実習が成り立っているというお話を改めていただいた。それは私が良い医者になることを期待している人がいると気づかせるものであった。

そんな気構えでご遺体と対面した時の、尊敬と感謝と、その対象は既にお亡くなりになり、そして今からメスを入れるという、あのなんとも言えない物悲しく申し訳ない心持ちは生涯忘れることはないと思われる。

解剖実習を進めて、新しい知識を沢

山得た。身体がどんな素材でどのようなに作られているか。それは、実際に触って、引っ張って、切って、初めてわかるものであった。想像と違うものがたくさんあった。それらを知ることが臨床の勉強に大いに役立つことが予感されるのに時間はかからなかった。私は医療マンガをよく読む。どのマンガでも専門的な説明を挟むシーンがたくさんある。まだ何を言っているかさっぱり分からない。しかし、解剖実習がある程度進んだ辺りから、読んでいる時のイメージに変化を感じた。相変わらず、なんで今この主人公はそのなんちゃら値を重要視しているのかはよく分からない。だが、どこの何が悪いのか、どこに出血しているのか、映像としてイメージできるようになっていた。今後の臨床の学びが楽しみになるばかりだった。

実習を進めるにしたがって、感じた事はまだある。それは、人体がとんでもなくよくできているということである。結合組織は密につきまり、なかなか切れない。腱と骨はいくら引っ張っても取れない。臓器は無駄なスペースが全くなく、手足や目の筋肉は細かった。そして、うんざりするほど沢山の血管と神経が網目のように全てを栄養、制御している。無駄な物が一つもないという感じであった。

感じたことはまだある。人それぞれ、身体が全然違うという点である。男女の差や歳の差だけではない。一人一人違ったのである。実習後半、閉鎖動脈が見つからず手をこまねいていた。結局、下腹壁動脈からの枝が代替をしていた。このような、人によって異なる破格が無数にあった。この辺にあるから何何神経と断定は出来ず、何筋に投射しているから何神経と決めるため、知識がますます重要であった。紙の上ではなかなか覚えられないそれらの知識も、実際に見て確認していくことで、頭に溶け込んでいった。

実習最終日。剖出で姿は変わってしまったが、お棺に丁寧に納め、最後は白菊の花束と共に綺麗にお送りした。なんだかもう知らない人のような感じがせず、寂しい気持ちだった。故人とご家族は、私たちが好奇心を満たすためにご献体頂いたのではないと存じ上げる。私達が将来治療する患者達のためである。この学部に来た以上は、その期待に答えることが責務であると改めて心得る実習であった。貴重な機会を与えてくださった、故人とご家族に改めて尊敬と感謝の意を表したい。

本当にありがとうございました。精進します。

左 中 彩 恵

今日納棺の日を迎え、解剖実習が終わった。緊張と恐怖心からそわそわしながら解剖実習室に入った日の事を思うと本当にあつという間で密度の濃い日々だった。たった六週間という短い期間だったが、六週間前と今とは私が見える世界は大きく変わったように思う。実習前まではアトラスを開いても、血管や神経が無秩序に張り巡らさされているようにしか見えず、ただただ難しい図だった。しかし今、何度めくり返してしまわくちやになったアトラスを開くと心臓が拍動し血液が身体へと巡っていく様子が鮮明に浮かんでくる。そして一つ一つの血管、神経、臓

器が意味を持ち互いに協調しあう姿に、
どうしてこんな構造が自然のなかで生
み出されたのだろうと不思議と感動で
一杯だ。

解剖実習において私が最も大切にし
ていたことは、ご遺体に対して正直で
ある事だ。受験勉強のような教科書の
丸暗記ばかりしてきた私ははじめ、教
科書と異なる血管の走行や臓器の形に
戸惑ってばかりだった。しかし実習を
進めていくうちに、私にとっての「先
生」は目の前のご遺体ただ一人であり
自分の眼でみて感じたことこそが真実
なのだと気づかされた。そして教科書
の情報ではなくご遺体と向き合う時間
をできる限り長く持ち、ご遺体とまっ
すぐに向き合おうと決めた。しかしこ
れを六週間という短い期間で実践する
ことは、葛藤やもどかしさの連続であっ
た。ごまかしなく向き合おうとすれば
するほど、作業に遅れが生じてしまう。
私の遅れを補い、手伝ってくれた班員
の皆の存在は本当にありがたく心の支
えとなった。もちろん今でも、教科書
で疑問が湧くたびに実習の時にもっと
ちゃんと見ておけばよかったと後悔し

たり、剖出がうまくいかなかった部分
や解決しきれなかった疑問へのもやも
やした気持ちはいくつも存在する。私
はこの気持ちを忘れずに持つておこう
と思う。今感じている疑問や後悔も持
ち続けて今後の授業や実習に臨んでい
れば、いつか全てがつながる日がくる
気がする。

最後に、実習を支えてくださった先
生方や六週間共に闘った班の仲間、そ
して何よりもたくさん学びを与えて
くださったご献体いただいた方に感謝
の気持ちを伝えたい。たとえ医師にな
るためとはいえ自分に解剖を行う権利
などあるのだろうか、という葛藤はご
遺体と対面し黙祷をささげる度に頭を
よぎった。しかし、今はその葛藤は責
任感に代わり私の中に刻まれている。
きつとご献体いただいた方やそのご家
族は実習での学びを糧に将来たくさん
の命を救って欲しいという思いでお身
体をささげてくださったのだと思う。
これまでとは違い、私には医師として
命を救う「責任」が生まれたのだと今
ひしひしと感じている。この責任感を
胸に、今後も努力を重ねていきたい。

須藤 永遠

私は実技が苦手だ。昔から座学の方
が得意で、実習中に用語を覚えられる
ほど器用ではない。だから、この実習
は入学して早々から私の中に大きな不
安としてあった。

私たちの班は、中間試問を終えるま
で剖出の速度が遅かった。さらに問題
であったのは、剖出が丁寧であるとか、
剖出部位への理解を深めているとかで
はなく、単純な手技のレベルの低さに
起因するものであったことだ。試問でこ
のことを指摘され、私なりに解決策を
考えてみた。それ以前、私たちの班は、
教員の方々に質問することに關して消
極的であった。だが、実習に対するモ
チベーションはむしろ高い方であったと
思う。ただ、手引きがある以上、これ
を読めば自己解決できるはずだと思っ
ていたからだろう。そこで、教員の方々
に積極的にアプローチすることにした。
手技のレベルが低いことは、剖出部位に
応じて選択すべきストラテジーを知ら
ないだけで、これを伺えば剖出速度は
向上すると考えたからだ。

このようにして、私たちの班は中間試問をきっかけに、単純に剖出の速度が向上したと言うだけではなく、剖出、延いてはこの解剖実習への向き合い方が大きく変化したと思う。そして、積極的に教員の方々にアプローチする中で、一人の先生に言われた言葉は不思議と胸に残り、今になって理解した。

「剖出できない、というのはご遺体に対するリスペクトが足りないんだよ」

決して責めることなく、諭すように伝えられたこの言葉を、とにかく剖出速度を向上させようと躍起になっていた当時の私は聞き流していた。リスペクトを払う時間を作るためには剖出が急がないといけない、と真逆の考えであったからだ。だが、心構えが変わりつつある中で新たな視点に立てた時、初めてこの言葉を理解した。

リスペクトとは、ご献体なさった故人の遺志を汲むことである。では、その遺志とは何であったのか。それはまさに医学の発展であろう。リスペクトを持つだけの心の余裕を得られた時、私は考えが変わった。

「もっと剖出しないと」

病に倒れた故人の構造は正常とは言えないものもあった。だが、解剖実習で見た構造は今も深く目に焼き付いている。ご献体なさった方が先生となつて、私に教えて下さっていたのだ。このことに気付いた私は、ようやく、ご献体なさった方を「先生」と呼ぶ意味、何故カリキュラム上では「勉強」する時間が少ないように見えるのかを理解できた。

このことに気付けた頃にはご献体なさった方の納棺を明日に控えていた。遅すぎたかもしれない。だが、最後に手を合わせた時に私の中にあった思いは、今のこの思いは、間違いなくあの頃とは違う。手枷だと思っていたものは、私が勝手にハンデにしていただけで、大きな成長のチャンスだった。ようやくそう思えるほど、私は解剖実習で前進できた。

最後に、ご献体いただいた故人とそのご家族の尊い御意思に感謝し、故人のご冥福をお祈り申し上げます。

相 馬 亜 玲

解剖実習を終えて、私は命について考えさせられることとなった。私は、解剖実習初日のネル布に包まれ花が添えられたご遺体がずらりと並ぶ光景が忘れられない。目に見える形で人の死を感じたのは幼稚園児の時の祖母のお葬式以来であった。ネル布を開くと、亡くなる前は紛れもなく私たちと同じように歩いたり、お話したり、ご飯を食べ、生きていた人が固く冷たくなった状態で横たわっていた。亡くなった人に触れるのはそれが初めてであった。金属、氷など固いものの、冷たいものは身の回りにたくさんあるが、そのどれも違った心に重くのしかかるような感触であった。自分を含め人間はいつか死ぬということ、死んだら自分の体はどのようなのかを今まで以上にはつきりと認識した。初めてご遺体にメスを入れたときは、その痛みを自分の体で想像してしまい解剖を進めるのが大変だった。さらに、ご献体いただいている以上失敗は許されないと過剰に自分に重圧をかけてしまい、予定か

ら剖出が遅れてしまいそうになった。そのときに、一人の先生から「失敗からも学ばせてもらう」というアドバイスを頂き、少し肩の力が抜けた。それからは、実習書や先生の指示通りに剖出していき、もし細心の注意を払っていないながらも手順を誤ることがあったら、そこからも学び、修正していこうという考えで実習に臨むことができた。睡眠時間を削ってまでも予習を頑張ったおかげか、幸いにも大きなミスなく終えることができてほっとしている。実際、ご遺体から非常に多くのことを学ばせていただいた。教科書だけではわからなかった、立体構造やそれぞれの位置関係を見ることができ、重さや長さを測ることができた。実習の終わりが近づくにつれて、予定の剖出が終わってネル布を閉じた状態で勉強をしている班が増えていく中、私たちの班はギリギリまでネル布を開いてご遺体から勉強させてもらった。隅々まで剖出して学ばせてもらったご遺体は解剖前とは全く変わり果てていることを、棺に入れる時に思い出した。その時、心からの感謝の気持ちが込み上げてくると

同時に、今更ながらメスなどで解剖できるほど人体はもろいのだなと実感した。

私は将来医師を目指している上に、解剖実習でご遺体から非常に多くのことを学ばせてもらったのにも関わらず、自分や自分の大切な人の遺体が解剖されることにまだ抵抗を感じてしまっている。抵抗を感じながらも将来の医学の発展の為にご遺体下さった故人とそのご遺族の方々には感謝してもしきれない。

中西 優 奈

解剖実習では、本当にたくさんの学びを得ることができた。教科書や実習の手引きで予習をして臨んだつもりが、実際にご遺体で確認しようとするとなかなかなくなってしまう。先生方や友人の力を借りながらなんとか解剖を進め、その日学んだことを忘れないうちに記録し、また翌日に備えて予習を始める。実習期間中は、そんな日々の繰り返しだった。教科書や手引きの情報が、い

ざ現場で実践しようとしてもなかなか適用されないことに、驚きと困惑と感動を隠せない毎日だった。

机に広げた教科書や資料から学ぶことは、当然基礎的な知識を得る上で非常に大切なことである。だが、それだけでは足りないということを、実習を通して痛感した。教科書には人体の平均的な構造について書かれている一方、私たちが実習室で向き合っているのは、そして今後患者として向き合うことになるのは、誰一人として全く同じ構造を持つことのない人である。一人のご遺体から贅沢に学びを得ることができ、実習の環境に感謝しつつ、実際に手を動かすことで臓器や組織の特徴をより鮮明に理解できることを実感した。臓器や組織がいかに複雑に関連し合っているかを、この目で見て、手で触れて、肌で感じることもできた。実習を通じて得たこのような視点は、将来医師になる者として、患者に寄り添い適切な医療を提供するために重要なものとなるだろう。

そして迎えた解剖実習最終日、ついにご遺体を納棺する日。これまでどん

なことを学んできたか、何かやり残していることはないか。実習期間の出来事を思い返していると、ついに目の前に棺が運ばれてきた。これで解剖実習も終わるのだと感慨に浸りつつ、棺の蓋を開けると、そこには一つの帽子が収められていた。

その帽子は、なんてことない、ごく普通の、黒いものだった。自分が被るには、やや小さいだろうか。触り心地は柔らかく、ぬくもりすら感じた。目の前に横たわるご献体いただいた方は、この帽子をよく被って生活していたのだろうか。それか、大切なご家族が使っていた帽子なのだろうか。この帽子は、きつとこの方にとってお気に入り、思い出のつまったものであったことだろう。

この瞬間、私は初めて、ご献体いただいた方の人生に触れたような心地がした。ただ臓器や組織について学んだ事項だけでなく、実習の背後にある人々の物語や想いまで胸に流れ込んでくるようだった。解剖実習で私たちが向き合っていたのはただの「人間」ではなく、生きていた人々であったことを改めて

感じた。その尊い重みを受け止め、心から感謝の念を抱きながら、実習最後の黙祷を捧げた。

最後に、ご献体いただいた方とご遺族の方々をはじめとし、真摯にご指導くださった先生方、共に励ましあいながら実習を乗り越えてくれた友人、そして解剖実習を支えてくださった全ての方々に、この場を借りて感謝申し上げます。解剖実習という貴重な機会をくださったこと、本当にありがとうございます。ございました。

馬部 遥 香

解剖実習の初日、私は実習室に入るまで解剖が始まるという実感が湧かなかった。だが、実習室に入った途端、菊の花が添えられたご遺体が並ぶのを見て、身の引き締まる思いがした。また、解剖が始まり、ご遺体にメスを入れた時、一度メスを入れてしまった以上安易な気持ちで後戻りはできないのだと思ひ、六週間誠意をもって貪欲に学ぼうという気持ちになった。

日々予習と復習に追われてハードではあったが、人体の構造や機能に興味をもって医学類に入った私にとって、解剖期間中は普段なら得られないような学びの連続で、毎日とても充実していた。解剖が始まるまで、筋肉の収縮のしくみや神経伝達について授業で学ぶことはあっても、筋肉や神経が体内でどのようになっているのかの具体的



令和四年度慰霊式（献花）

なイメージは掴めていなかった。しかし、実際に解剖してみると、初めは神経や血管、結合組織を見分けることができなかったり、筋肉同士の境目がわからなかったりと、どれがどの構造物なのかわからなかったが、慣れてくると、筋肉がどのように骨に付着しているかや、神経がどの筋肉を支配しているかということに着目できるようになった。そして、どの神経と、それに支配されるどの筋肉が働いて腕や脚を動かすことができるのかということを理解することができた。実際に自分の手で剖出し、自分の目で見たことで、解剖学の知識が確かなイメージとして定着したように思う。

解剖を進める中で印象に残った場面はいくつもあるが、その中でも奇静脈の剖出が心に残っている。私の班のご遺体では、奇静脈が正中よりも左にあり、教科書やアトラスに載っているものとは異なる形が見られた。私たちが実習で扱わせていただいているのは模型などではなく、生きていた人であることを再確認するとともに、人体にはそれぞれ個人差があるということを実

感じ、人体の構造のおもしろさを感じた。また、この経験は、最終日に先生がおしゃっていたことでもあるが、将来私たちが病院実習でお世話になったり、医師として出会ったりする患者さんはひとりひとり異なっていて、ひとりひとりに向き合わなくてはいけないのだということを学ぶきっかけとなった。

納棺の日に、ご遺族が用意された棺や、内容は見ていないが棺の中にご遺族から故人に宛てたお手紙が入っているのを見て、故人はご遺族にとって大切な家族で、一人の人として人生を送った方なのだと感じた。その故人の医学の発展を願う気持ちと、承諾してくださったご遺族の思いに応えられるように、良い医師になるべくこれから医学の勉強に励もうと決意した。

最後に、私たちの学びのためにご献体くださった故人とご家族に感謝申し上げます。故人の思いを忘れず、将来医学に貢献できるよう励んで参ります。ありがとうございました。

筑波大学白菊会 規約

(名称及び事務所)

第一条 本会は筑波大学白菊会と称し、その事務所を筑波大学医学群内に置く。

(目的)

第二条 本会は会員の親睦と献体運動の推進を図ると共に、医学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を筑波大学医学群に寄贈することを目的とする。

(事業)

第三条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1、 会員の親睦
- 2、 献体運動の推進
- 3、 会報の発行
- 4、 その他、本会の目的を達成するために必要な事業

(会員)

第四条 本会の目的及び事業に賛同し、自らの遺体を寄贈する目的を持って入会を申し出た者を会員とする。但し、家族、またはこれと同様の者の同意を得た者でなければならない。会員は本人の希望により退会することができる。

(役員)

第五条 本会に次の役員を置く。

- 1、 会長 1 名、理事長 1 名、理事若干名、幹事若干名
- 2、 会長は、筑波大学医学群長が務める。
- 3、 理事は、筑波大学医学群解剖学担当の教員が務め、理事長の選出は、理事の互選による。
- 4、 会長は本会を代表し、会務を総理する。
- 5、 理事長は会務を統括し、理事は本会の運営に関して協議し会務を分担する。
- 6、 幹事は筑波大学医学群の事務職員の中から、会長が委嘱し、庶務及び会計を処理する。

(任期)

第六条 役員の任期は 2 年とする。但し、再任を妨げない。

(顧問)

第七条 本会に顧問若干名を置くことができる。顧問は、理事会の議決により、会長がこれを委嘱する。その任期は 1 年とする。但し、再任を妨げない。

(会議)

第八条 総会は、年 1 回会長が召集し、事業報告及び会員の意見交換の場とする。

(会計年度)

第九条 本会の会計年度は、4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までとする。

(経費)

第十条 本会の経費は、寄付その他の収入もってこれに充てる。

(補則)

第十一条 この会則に定めるものの他、本会の運営に関して必要な事項は、理事の同意を得て会長が定める。

(感謝状)

第十二条 献体された遺族に対し、会長（医学群長）より感謝状を交付する。

付則

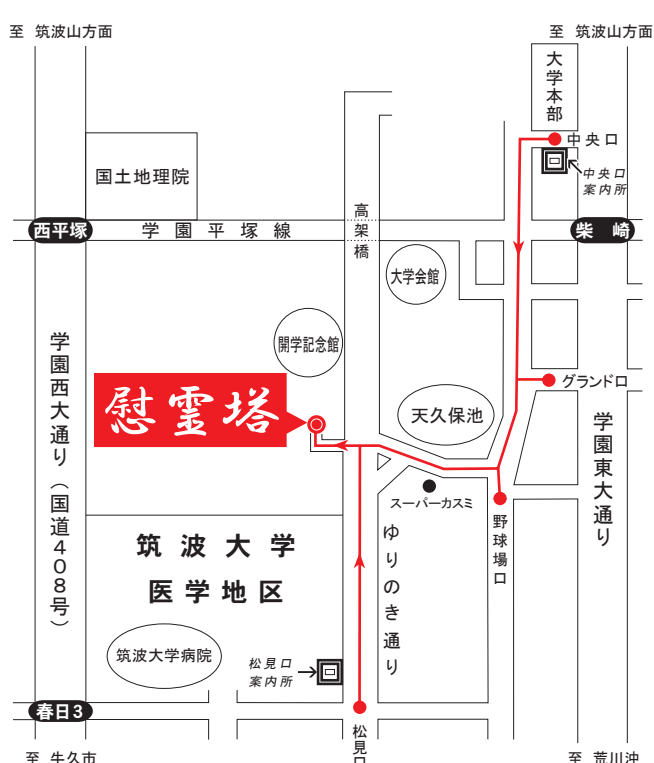
この規約は、昭和 58 年 4 月 1 日から施行する。

この改正規約は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

筑波大学白菊会慰霊碑案内図



筑波大学白菊会慰霊塔案内図



(交通ご案内)

車利用の場合（常磐自動車道）

- 土浦北ICから15分
- 桜土浦ICから23分

高速バス（つくば号）利用の場合

- 東京駅八重洲南口（②のりば）よりJRバスまたは関東鉄道バス「筑波大学行き」乗車～「つくばセンター」下車（約70分）→つくバス北部シャトルに乗り継ぎ

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口（③のりば）関東鉄道バス「つくばセンター行」乗車～「つくばセンター」下車（30分）→つくばセンターより下記のつくバス北部シャトルに乗り継ぎ
- つくばエクスプレス（TX）つくば駅→隣接するつくばセンター（③のりば）つくバス北部シャトル「筑波山口行」乗車～「大穂窓口センター」下車（約25分）

（所在地）〒300-3253 茨城県つくば市大曾根根本333
（お問い合わせ）029（864）6606

・お車でお越しの際は、上記の所在地あるいは電話番号をナビにご入力願います

(交通ご案内)

車利用の場合（常磐自動車道）

- 土浦北ICから20分
- 桜土浦ICから20分

高速バス（つくば号）利用の場合

- 東京駅八重洲南口（②のりば）よりJRバスまたは関東鉄道バス「筑波大学方面」乗車～「筑波大学病院入口」下車（約75分）→慰霊塔まで徒歩（約10分）

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口（③のりば）関東鉄道バス「つくばセンター行」乗車～「つくばセンター」下車（30分）→つくばセンターより下記の「筑波大学循環バス（右回り）」に乗り継ぎ
- つくばエクスプレス（TX）つくば駅→隣接するつくばセンター（⑥のりば）関東鉄道バス「筑波大学循環バス（右回り）」乗車～「平砂学生宿舎前」下車（約15分）

お願い

ご住所を変更された場合は、白菊会事務局（電話 〇二九一八五三一三二三〇）へお知らせ下さい。住所が分からずご連絡がとれないケースが増えております。



会員が亡くなられた際、

ご遺族の方々にしていただくこと

一、ご遺体を大学へ引渡す日時の打合わせ

まずご遺族の間で次のことをお決めになって下さい。

- (1) お通夜をせずに直ちに引渡す
- (2) お通夜をしてから引渡す
- (3) お通夜をして告別式をすませてから引渡す

右のうちどれかにきまりましたら献体事務室の担当者（電話〇二九一八五三一三二三〇）と、ご遺体引渡しの場合と時刻を打合わせてください。休日・夜間のお引取は大鵬社（電話〇二九一八二一八三三三）に直接連絡下さい。

ご遺体の搬送は大学がお引受けし、原則として自動車がお迎えにあがります。(1)の場合には必要があれば大学からお棺を持参しますが、この点も打合わせて下さい。

(注) ご遺体の大学への引渡しが二十四時間を超えるときはお棺の中へドライアイスを入れ、ご遺体の保存に御留意下さい。

二、必要書類の用意

(1) 「埋火葬許可証」をお取り下さい。これは医師の死亡診断書をそえて市町村の役所へ「死亡届」を提出すると交付されます。

(2) 「埋火葬許可証」の火葬場所は県内の方は最寄りの火葬場所をご記入願います。なお、県外の方は土浦市田中二丁目一六番三三三号、土浦市宮齋場、火葬年月日は一年後として下さい。

(3) 「解剖に関する遺族の承諾書」については大学から書式を持参しますので、ご署名とご捺印をお願いいたします。